

## ピアサポーター養成講座が参加者の自尊感情高揚に及ぼした影響に関する考察

- 2010年度A市ピアサポーター養成講座参加者を対象に -

九州保健福祉大学 黒須 依子(04058)

キーワード：精神障がい者、自尊感情、ピアサポーター養成講座、

## 1. 研究目的

自尊感情とは人が持っている自尊心、自己受容などを含め、自分自身についての感じ方である。ローゼンバーグ(Rosenberg, M)は日本の精神障害者のように社会的スティグマを受けている者の自尊感情は一般に低い状況にあると述べている。実際に、筆者も自身の意思や行動に自信なさそうに地域生活を送る精神障がい者の方々に会う。一方、意義ある援助を行うことが自尊感情高揚の手段として役立つと中村陽吉らが述べている。なお、自尊感情の高揚が援助行動の結果としてもたらされるとすれば、援助行動は自尊感情の高揚あるいは低められた自尊感情の回復や防衛のための1つの手段としてみなされるだろう、と原田<sup>1)</sup>は考察している。

以上の自尊感情に対する定義や捉え方を参考に、本研究では、A市委託事業として実施された2010年度ピアサポーター養成講座の参加者が講座プログラムとして行ったピアサポート活動が各参加者の自尊感情高揚に及ぼした影響について考察することを目的とする。

A市では社会復帰施設等を利用する在宅精神障がい者をピアサポーターとして、県保健所を中心に2003年より2回/年の割合でピアサポーター院内訪問活動(以下、「院内訪問活動」と記す)を実施してきた。2003年時のA市に所在する精神医療保健福祉関連施設は精神科病院2、作業所1、小規模授産施設1であり、精神障がい者を利用対象者とする地域の支援施設が非常に少なく、当時A市内の各精神科病院には入院期間20年以上の者が精神科病院での全入院患者数の約40%であった。A市では以上のような社会背景の下、社会的入院者の地域移行に向け、退院意欲の向上や地域の社会資源に関する情報提供等を主な目的として市内2精神科病院での院内訪問活動を行ってきたという経緯がある。

しかし、当活動の課題は入院患者さんの院内訪問活動に対する参加意欲や地域の社会資源に対する理解が思うように高まらず、市内の在宅精神障がい者におけるピアサポート活動に対する理解や認識も広がっていないことだった。そこで、A市では精神障がい者ピアサポート活動の普及と院内訪問活動に対する市内精神科病院の理解の向上を目的に、在宅の精神障がい者を対象に2011年度ピアサポーター養成講座を開講することとなった。当講座では2011年度7月～9月(第1期生：参加者7名)、11月～2月(第2期生：参加者8名)に分けて2回、各期計8回実施し、3月にまとめの研修として全参加者を対象に1泊2日のピアサポート活動視察研修を行った。尚、各期の主なプログラムはピアサポート活動に関する研修、ミーティング、施設見学、病院訪問、等である。

## 2. 研究の視点及び方法

本研究はストレングスの視点と障がい当事者の主体性を尊重する視点をもち、取り組んだ。研究方法は、A市ピアサポーター養成講座の参加者計15名を対象に、講座開始時と終了時に行った質問紙法によるアンケート調査を行った。主な調査項目〔( )は、終了時アンケートの質問項目〕は、当講座で学びたいこと(感想)、(印象に残るプログラム)、(役に立ったと思うプログラムとその理由)、交友状況(講座受講後の自身の変化)、及びローゼン・バーグによる自尊感情に対する10の質問項目〔開始時・終了時共通〕、等である。異質問項目 ~ の調査結果は単純集計し、の自尊感情評価については、ローゼンバーグの手法を用いて1期生、2期生における自尊感情の変化を分析した。また、本講座におけるミーティングや学習会での参加者の発言内容は、模造紙に記述し参加者に提示する形式で講座を進め、別紙に記録として残した。

### 3. 倫理的配慮

養成講座参加者の人権尊重を基盤に、参加者の個人情報保護には十分な配慮を行った。

### 4. 研究結果

まず、講座終了時のアンケート項目「ピアサポーター養成講座に参加しあなたに何か変化はありましたか(複数回答)」に対する回答を単純集計した結果は次の通りであった。第1期生、第2期生共に降順に 人の話を最後までじっくり聴くようになった、相手の気持ちを考えて発言するようになった、以前より自信が高まった、他人の役に立つことをしたいという気持ちが高くなった、ピアサポーター養成講座の参加メンバーと仲良くなった、であった。この結果から、当講座参加による参加者の自信、他者を援助したいという意思が高揚していること、及び他者との交流関係が広がっていることが明かとなった。

次に講座参加による自信や他者を援助したいという意思の高揚状況が表れる講座終了時の「講座の感想」に対する参加者の発言内容を紹介する。A氏「障がいを持っている自分のできることは何かというのを前向きに考えられるようになった」、B氏「自分は家の手伝いや、自宅で趣味をしているだけだったが、障がい者でも社会に出て行く場があることが分かった」、C氏「自分から人に話しかけることができるようになった」・・・等である。

また、本研究ではローゼンバーグによる質問項目を使用した自尊感情分析において、回答項目を「3. どちらともいえない」を設定した5段階評価とした為、参加者の自尊感情の高揚状況をローゼンバーグによる手法に基づく結果分析が困難となってしまった。当講座はピアサポーターのリーダー育成を目的に2010年度ピアサポーター養成講座修了生を主な参加者として、2011年度も継続実施する予定である。よって、その際には自尊感情に関するアンケート項目と回答項目を見直し、2011年度ピアサポーター養成講座参加を対象に自尊感情に関するアンケートを実施し、ピアサポート活動における参加者の自尊感情の高揚に対する影響に対する考察を試みたいと考えている。

#### 【引用文献】

- 1) 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編「セルフ・エスティームの心理学」ナカニシヤ出版、1992、p156